work way 特集

可能性を引き出してくれるもの 自分を成長させるチャンス

くも膜下出血になると、30～40％の人が死亡、約30％の人に後遺症が残り、元通りに戻れるのは わずか30％にすぎない と言われる。原因の8割を占める脳動脈瘤（破裂）の代表的手術法である「脳動脈瘤クリッピング術」の症例数が1500を超え、日本でも有数の脳外科医として知られる佐藤昇樹さん（51）。約25年に渡り、第一線の脳外科医として24時間体制で実践してきた。2005年3月、自身の心臓手術を経験。「何が恐いか、何がうれしいかなど、医師がいくら想像しても想像しきれないということを認識することから医療が始まる」と話す。そして、昨年10月に「さとう脳外科クリニック」を開設。豊富な経験と実績に裏打ちされた的確で迅速な診断が信頼を集め、評判を呼んでいる。「患者さんと家族に安心して喜んでいただける医院をめざします」を理念とし、地域医療への貢献に邁進する佐藤医師の生き様を追った。

医療の集約

脳外科医・佐藤昇樹は、常に真摯な姿勢で医療と向き合ってきた。約25年間の勤務医時代、くも膜下出血の症例数は、「1日に1件、1週間に2分の距離に居を構え、年間150件を超える急患に対応してきた」。

病院と自宅を肉弾電話で結び、連絡が入れば昼夜を問わず治療に駆けつける毎日だが、そのことを「苦にしてきた」と当時の心境を思い出すかのように話す。

「救命者を助けることに、これで救命できたと思ったことは一度もない。『救命者の同士がすべての解決策になるわけではない。技術には限界があるのだ』と修練を重ねてきた佐藤先生。「技術の向上がすべての解決策になるわけではない。技術には限界があるのだ」と修練を重ねてきた佐藤先生。「技術の向上がすべての解決策になるわけではない。技術には限界があるのだ」と修練を重ねてきた佐藤先生。

「救命者の同士